

篠原房枝・小川政弘作 「先生 1」

加藤先生 えー、だから、この助動詞の過去プラス動詞の原形が仮定法の過去で、現在の事実の反対である。したがってこの文は…。(FO)

井上順 あ～あ、退屈な授業。Sleeping time…

伊藤孝雄 (小声で)おい、内野、お前、何読んでいるんだよ？

内野裕子 え？ ああ、これ？ クリスティーの「アクロイド殺人事件」。

伊藤 お前も好きだな。去年は必死に横溝正史を読み尽くしたと思ったら、今年はクリスティーか。しかし、あれだけクラブやって、本もこんなに読めるのは、このリーダー授業のお陰だよな。

山田一郎 まあな。眠ってもよし、内職をしてもよし。我ら生徒にとっては、この授業は“絶好のチャンス”だよ。

井上 おい、お前ら少し静かにしろよ。

伊藤 なんだよ、優等生。あいつの授業、「黙って聞け」って言うの？

井上 そんなんじゃないよ。眠れないからさ。

内野 へえ、井上君も授業中に居眠りするの？

井上 ああ、僕だって、あいつ好きじゃないからな。

伊藤 そうか、お前もか。いや知らなかった。お前でも毛嫌いする教師がいたのか。まあ分かるけどな。大体あの加藤は、退屈な授業っていうだけじゃなくて、人間的になんか気に食わないんだ。

山田 そうそう。あいつは時々、本当におかしいとしか思えないことを言うだろ？ あれでも教師かね。だけど、井上も、おれたちの仲間だなんて、なんとなく心強いよ。

加藤先生 ……ということだ。何か質問あるか？ なければ、ここまで。

効果音 (終業のチャイム)

井上 起立。礼！

効果音 (教室のガヤ)

ナレーション 青春高校の英語教師、加藤先生は、どうも生徒からの信望は薄いようです。それというのも、生徒のことにはまったくと言っていいほど無関心で、いつもマイペースで一方向的な授業をしていたからです。こんなこともありました――。

伊藤 オッス、井上。

井上 あ、おはよう。

効果音 (2人が教室に入るドアの開く音)

山田 やあ、お二人さん、おはよ。あいつの話、聞いた？

内野 あいつって、加藤のこと？

山田 そう、昨日の放課後の話…。

井上 いや、知らないよ。

伊藤 おれも知らない。(身を乗り出して)あいつまた何かやったのか？

山田 ああ。昨日クラブ終わって、顔を洗いにいったら、ブラバンの連中が降りてきて、話してるの聞いたんだけど、なんか「退部したい」って言ってきた部員のこと、クラブの反省の時、話し合いをしていたら、あいつが「退部しないで続けろ」って言ったんだけど、その部員がどう

しても聞かないもんで、しまいには「やめたきゃ さっさとやめろ！」ってヒステリックにどなりつけたんだってよ。

伊藤 へえ。全くあいつ、感情が豊かというのか、起伏が激しいって言うか…。この間は2組で、授業のやり方について生徒から文句が出て、討論で激しくやり合っているうちに、あいつ、涙声になって、「お前ら、何も分かってやしないんだ」って。2組のやつら、何も言う気がしなくなっただって言ってたぜ。

井上 言えてる。1年の時の一番最初の授業の時から、気に食わないんだよ。ドアを開けるなり、いきなり英語でしゃべり始めて、15分も一人で陶醉しきっていたもんな。おれたちのことなんかちっとも考えてない。「どうだ。おれの授業はこんなもんだ。ついてこれるやつはついてこい」って感じだよ。

伊藤・山田 そうそう。

ナレーション …という具合に、山田君たちのように3年生ともなると、先生の好き嫌いもはっきりしてきて、特に、嫌いな先生に対するけなしようは相当なものでした。ところがある日――。

井上 えーと、ここが鈴木先生で、千葉先生の机は…。ああ、ここか。

効果音 (井上が職員室を出ようとするドアの音)

加藤先生 お、井上。なんだ、また委員長の仕事か？

井上 あ、加藤先生。ええ、まあ。文化祭が近いもんですから。

加藤先生 そうか。大変だな。まあ高校生活最後の思い出だ。しっかりやれよ。

井上 (少し驚いて)はい。

ナレーション 井上君はハッとしました。今まで知らなかった加藤先生に接したような気がしたのです。

井上(モノローグ)(エコー)あれが、加藤先生か?! (間)僕は今まで、何か間違ったことをしてきたんじゃないのかな。山田や伊藤たちの悪口に調子を合わせて、表面だけの加藤先生を評価してきたんじゃないか? それとも、やっぱり…。

ナレーション それから数日後のある日――。

井上 あれ、もう6時かよ。腹減ったなあ。

山田 ほんとだ。なんだか目え回ってきたよ、おれ。文化祭まであと3日だからこうやって頑張ってたけど、これじゃ持たねえよ。あー裕子の顔がドーナツに見えてきた。

内野 やめてよ。だけどほんとに、おなかすいたわね。

効果音 (「ガラッ」と戸の開く音)

伊藤 おい、差し入れだぞ。見ろほら、マクドナルドのでっかいやつとミルク、それに、ほら。

山田 わっ、スゲえ、デザート付きか。

内野 だれなの、こんな神様みたいな人? 鈴木先生かしら? それとも、千葉先生?

伊藤 それがさ、宿直のおじさんが届けてくれたんだけど、いくら聞いても教えてくれねえんだよ。

井上 ふーん。でも助かったなあ、みんな。ありがたく頂いて、残りの制作、やっちゃまおうぜ!

一同 「おー!」「はい!」「やるぞ!」

ナレーション 一同は勇気百倍して、このなぞの人物に感謝しながら、残りの仕事にぶつかっていきました。ところが、その差し入れはその夜だけではなく、2日目の夜も、そしていよいよ明日は文化祭という3日目の夜も続いたのです。

山田 おい井上、今日で3日目だろ。いくらなんでも黙ってもらっちゃ悪いよ。だれなのかはっきり知って、お礼言わなきゃ。

井上 僕もそう思っていたんだ。だれかが、僕たちのことを思って、こうやって身銭を切ってやってくれてる。そう考えただけで、胸がジーンとして来るよ。

内野 ほんとよねえ。この学校にそんな人がいたなんて、とても考えられなかったようなことだわ。

効果音 (「ガラガラ」と戸の開く音)

伊藤 おい、今、宿直室からだれか教員室のほうに歩いていったぞ。おれたちだけだと思っていたら、まだ先生がだれか残っていたんだ。きっとその先生だよ、この差し入れ。

山田 そうか！ よし、みんな、教員室へ行こう。

ナレーション 4人は、教員室に急ぎました。ドアのそばに来ると、中から小さな声がするのです。4人は、意を決してドアを開けました。

効果音 (戸の開く音)

山田 あっ。

内野 か、加藤先生…。

ナレーション 明かりもつけない教員室で、ただ一人、机の上に頭を垂れていたのは、あの嫌われ者の加藤先生だったのです。

井上(モノローグ) やっぱり…。 “もしかしたら？”と思っていたら…。するとあの声は、…祈りだ！ 先生は祈っていたんだ。

ナレーション 4人に気づいた加藤先生が、慌てて手のひらでぬぐった涙を、だれも見逃しませんでした。

加藤先生 やあみんな、どうした？ 最後の仕上げは終わったか？

伊藤 せ、先生。あの差し入れは、あれは…。

加藤先生 ん？ (軽く笑う)腹が減っては戦はできんからな。みんな、まあ座れよ。

ナレーション 一同は、加藤先生の周りに腰を下ろしました。井上君は、先生の机の上に、聖書が拵げられてあるのに気づきました。

井上 先生、あの、もしかして、先生はクリスチャンなんですか？

加藤先生 ん？ ああ、そうだよ。わたしはイエス・キリストを信じている。クリスチャンとしてまあ自分なりになんとか教師としての務めを果たそうとしてきたんだが、日ごろ、十分なこともできなかったなあ。君たちが、わたしのことをどう思っているか、わたしも知らないわけじゃなかった。みんな、わたしのことを、“冷たい”“一方的だ”“ちっともおれたたちのことを考えてない”と思っただら？ どうだ、伊藤？

伊藤 そ、それは…。

加藤先生 (笑う)いいんだよ。しかし、わたしはわたしなりに、一つの信念を持ってやってきたつもりだ。それは、このような厳しい受験体制の中で、この、なんというか、一つの鑄型いがたの中に、みんなが十把一絡げじっばひとからのように詰め込まれていくのを見ながら、“そうじゃない。本当は、一人一人が、自分の人格を生かして、自分の力で物を考え、たくましく生きていってほしい”といつも祈っていた。教師は、遠くでそれを見守っていけばいいと。——ま、それがみんなには、冷たく映ったんだろうな。今度のことは、みんなが最後の文化祭で久しぶりに燃えているのを見て、わたしも一つ、ささやかな仲間入りを、と思ったわけだ。あ、そうそう、あのタイトルは少し硬いな。もう少し柔らかくしたほうがいいぞ。

ナレーション 4人とも、顔がほてるような恥ずかしさの中で、何とも言えない心の高鳴りを覚えていました。それは、長い間失っていた、大事なものを見つけた時の感動に似ていました。次の日の文化祭。3年B組の教室の展示物の上には、きれいなバラの造花に囲まれて、次

のような言葉がはられていました。「加藤先生に、愛を込めて」——。

<完>